



Title	ヴォルテールのパスカル批判
Author(s)	山上, 浩嗣
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴォルテールのパスカル批判¹⁾

山上 浩嗣

ヴォルテールは、パスカル批判文書を、1719年ごろから英国滞在期間を含む約15年間にわたって、断続的に書きためていた。これが急遽、英国見聞録の集成である『哲学書簡』に、末尾の第25信として、「パスカル氏の『パンセ』について」と題されて付加される。ルネ・ポモーは、この理由がシャトレ夫人との出会いにあると推測している。第25信が印刷に付されたのが1733年7月1日、夫人がヴォルテールの書簡に初めて登場するのが7月3日である。ポモーによれば、ヴォルテールが、知性と母性を兼ねそなえた彼女（夫人はヴォルテールよりも12歳年下であったが）のもとで幸福を見だし、生来の悲観的な性質を癒やすことができたがゆえに、「崇高な人間嫌い」(XXV, LP, p. 164)であるパスカルにあらためて敵意を抱いたのだという²⁾。

一方、アントニー・マッケンナは、『哲学書簡』校訂版の序文で、本書にパスカル批判が組み込まれるに至った主たる理由を、次の3つに見ている³⁾。その第一は、『パンセ』がまれに見るベストセラー書であったことだ。1670年から1734年までの間に、『パンセ』はフランスで56版、英国で3版、オランダでも数版を重ねたという。よく知られたこの作品を批判することは、自分の見解を広める効率のよい手段であった。

第二は、1727年にパリのサン＝メダル教会で次々に生じた「痙攣」と奇蹟的な治癒現象をめぐる論争において、『パンセ』がよく引き合いに出されたことである。モンペリエ司教のkolbeール・ド・クロワシー (Charles-Joachim Colbert de Croissy) は、この奇蹟が自分たちを支持する神意の表明にほかならないと主張するジャンセニストたち⁴⁾を擁護するために、しばしば『パンセ』の奇蹟に関する断章を引用した。これに対して、アンブラン大司教のゲラン・ド・タンサン (Pierre Guérin de Tencin) は、自著でジャンセニストをべてんと断じて告発し、『パンセ』

1) 本稿は、2015年3月7日開催、第76回大阪大学フランス語フランス文学研究会、赤木昭三先生追悼シンポジウム「パスカルと後世」(大阪大学豊中キャンパス)における発表原稿に加筆を施した論考である。

2) René Pomeau, *La Religion de Voltaire*, Paris, Nizet, 1969; nouvelle édition revue et mise à jour, 1995, p. 236-237.

3) A. McKenna, « Introduction », LP, p. 19-29.

4) 1717年、教皇は大勅書ウニゲニトゥス (*Unigenitus*) にて、パスキエ・ケネル (Pasquier Quesnel) の新約聖書に関する論考『道徳的考察』(*Réflexions morales*) のなかに見つかることされた101の命題を、「ジャンセニズム」に通ずるとして断罪する。これに対してポール＝ロワイヤル関係者は激しく反発し、ケネルの著作を判断するための公会議開催を要求した。そのため彼らは「上訴者」(Appellants) と呼ばれた。これに敵対し、大勅書を支持する人々は「大勅書支持者」(Constitutionnaires) と呼ばれた。

の諸断章を批判した。ヴォルテールは、タンサンの立場に同調し、パスカルを「ジャンセニストの狂信の長老」とみなして弾劾した。

そして第三は、ヴォルテールが1722年に書いた『ユラニーへの書簡詩』が、1731年にパリで再び回覧され、『パンセ』からの影響が明白な匿名の著者によるヴォルテールへの反発表明の詩が、翌年3月の『メルキュール・ド・フランス』に掲載されたことである。そもそも、この『ユラニーへの書簡詩』は、パスカルを称揚するルイ・ラシーヌの詩「恩寵」に抗して「仮借のないジャンセニズム」を告発するために書かれたものであった。

このように、ヴォルテールは、パスカルを批判する動機にこと欠かなかった。英国滞在中にロック、シャフツベリ、ポーブの合理的で楽観的な哲学に影響を受け、ますます強固な理神論的信念を抱くようになった彼にとって、原罪による人間の本性の墮落をキリスト教の中心的な教義とみなし、人間の理性の無力さを強調するパスカルの思想は、人類の幸福を脅かすものとさえ映った⁵⁾。『哲学書簡』第25信は、人間の理性に信を置き、社会において共同生活を営む人間の現世における幸福を称揚する点で、ニュートン力学やロックの感覚論に深い敬意を示し、英国の開明的な議会政治や信仰の自由を賞讃する同書全体の趣旨によく適合していたと言える。

本論では、『哲学書簡』におけるヴォルテールのパスカル批判を取り上げ、両者の立場の違いをとくに顕著に表す次の4つの論点に注目し、ヴォルテールの宗教観および道徳観を具体的に検討しよう。その4点とは、1) 信仰と理性の関係、2) 人間の条件、3) 気晴らし、4) 身体と生命である。

1. 信仰と理性の関係

まず、『パンセ』の大部分が未完の著「キリスト教護教論」の準備メモからなることを想起しなければならない。パスカルとヴォルテールの思想の違いは、まずはこの護教的意図の存否に関係している。

パスカルの叙述の目的は、聖書と教義を正当化し、読者を正しいキリスト教の信仰へと導くことである。パスカルが具体的にどのような読者を想定していたかという重要で興味深い問題については、ここで立ち入った考察を行う余裕はない⁶⁾。ただ明らかなのは、パスカルが信仰を理性との関係に基づいて正当化しようとしていたことであり、その意味で、彼が主として想定していたのは、宗教の一見非合理的な内容を理由に信仰を躊躇または拒否していた人々であったと言える。『パンセ』の多数の断章が、人間の無力な理性によって信仰の玄義を理解しえない

5) 同時代の思想的布置におけるヴォルテールの理神論の位置づけについて、次を参照。赤木昭三『フランス近代の反宗教思想—リベルタンと地下写本』岩波書店、1993年、296-301頁。ジョルジュ・ミノワ『無神論の歴史—始原から今日にいたるヨーロッパ世界の信仰を持たざる人々』石川光一訳、法政大学出版局、2014年、下巻、624-630頁。

6) パスカルの『パンセ』が読者として想定していた人々について、次の研究が参考になる。赤木昭三「パスカルの『パンセ』とリベルタン」、『ガリア』54号、2015年3月、11-28頁。Tetsuya Shiokawa, «Le péché originel dans l'apologie pascalienne : stratégie et enjeux», in *Chroniques de Port-Royal*, n° 63, 2013, p. 243-253.

のは当然であること、言いかえれば、理性によって信仰が不可解であるという事実そのものが、理性によって了解されるべきことがらであることを説いているのである。ところがヴォルテールは、このようなパスカルの目的を共有せず、そのためのレトリック的な戦略およびその効果についても一切論評しない。ヴォルテールは信者の立場から、パスカルの主張を評価している。彼にとって信仰と理性の区別は自明のことであって、教義が理性を超えた内容であるという事実は、信仰の妨げになるどころか、むしろその正当性の理由となる。彼は1739年刊の自身の著作集で、『哲学書簡』第25信の導入部分の末尾に次の文言を付加している。

私がおもうに、形而上学がキリスト教を証明するものではないということ、有限が無限よりも下位にあるのと同様に、理性は信仰よりも下位にあるということ、は、きわめて正しい。(XXV, addition en 1739, LP, p. 238)

また、「原罪」という教義をめぐるパスカルの有名な一節「この玄義が人間にとって不可解である以上に、この玄義がなければ人間というものが不可解なのだ」(Passage des *Pensées* cité dans XXV, rem. III, LP, p. 165) に対して、ヴォルテールは、「私は、原罪の玄義が私の信仰の対象であって理性の対象ではないことを知っている。人間とは何かを、玄義がなくても十分私は理解している」(XXV, rem. III, LP, p. 165) と反論している。だがパスカルは、この教義が理性に反するにもかかわらず信じるヴォルテールのような人々ではなく、そうであるがゆえに信じない人々を相手に語っているのである。ヴォルテールはさらに、「隠れたる神」の理論(神は神を全力で探求する人々にだけ姿を現すという教え [S644-L781])に基づいた、パスカルによる宗教の証明のさまざまな試みを、「人々の目の前では、そうした学殖の闇のかわりに、信仰の光だけを示したほうが、はるかに理にかなっているだろう」(XXV, rem. XVIII, LP, p. 175) と切り捨てているが、「信仰の光」の尊さをそのまま告げても、相手は回心に至らないというのが、パスカルの護教論構想のそもそもの出発点であったのだ。

一方、ヴォルテールは同時に、キリスト教の教えのなかにも、理性にかなった要素が存在することも指摘している。たとえば彼にとって、「肉体の復活」や「処女懐妊」は、理性による推論によっては導かれえないため、純粋な信仰の対象であるのに対して、「物質は自力では存在せず、自力では運動をもたない」ことからすれば、(神による)物質の「創造」は、推論によって証明できる真理であるため、理性の対象であるという(XXV, rem. LXV, addition en 1742, LP, p. 247)。また、パスカルが人間には絶対に不可知であるとする「神の存在」も、ヴォルテールにとっては、理性によって証明可能な命題である(XXV, rem. LXIX, addition en 1742, LP, p. 248; rem. LXXII, addition en 1742, LP, p. 249)。こうしてヴォルテールは、キリスト教の教義をすべて超自然的な神秘とみなすのではなく、その一部を人間の理性に適合的であるとするすることで、理性を超えた教義への信仰を正当化しているように見える。対してパスカルは、宗教の教えを人間の無力な理性によって論証しようと試みる

態度そのものを傲慢であると説くのである。

2. 人間の置かれた条件

パスカルの護教論の戦略の主眼は、人間の現状が不幸で悲惨なものであると読者に感じさせることにもある。彼はキリスト教こそが、そのような悲劇的狀況からのもっとも有効な救済手段であると説得しようとする (S182-L149 [918])。

このような護教的意図とは無縁であるヴォルテールにとって、パスカルが観察する人間の境遇は、脱却すべきものではなくて甘受すべきもの、否定的なものではなくて好ましいものとなる。たとえば、パスカルにとって、原罪によって引き起こされた人間の「二重性」——人間は原初の偉大な本性のかすかな痕跡を保持しながら、今は盲目と邪欲の悲惨な状況に置かれており、それが第二の本性となっているということ (S182-L149 [920]) ——は、人間の不幸な現状の明白な証拠として提示されている。ところがヴォルテールは、人間が二重性を帯びた存在であるという論敵の認識を共有した上で、そこに否定的な価値を見いださない。

人間が完全無欠だとしたら、神になるだろう。そして、あなたが矛盾と呼ぶあのいわゆる対立は、人間という合成物のなかに含まれる不可欠な成分なのであり、それこそが人間の正しいあり方なのだ。(XXV, rem. III, *LP*, p. 166)

このような現状肯定は、護教論者パスカルの姿勢とはもっとも遠いものである。同様に、個人の職業選択にその土地の習慣が大きな影響力をもつという事実を、パスカルが驚きをもって報告しているのに対し、ヴォルテールはこれを、「まことに自然で、まことに道理に適っている」と冷静に受け止めている (XXV, rem. XXI, *LP*, p. 176)。彼にとって、われわれにそなわった性質や傾向を嘆くのは無益なことにすぎない。ヴォルテールは、人間存在を悲惨と断じるパスカルを「狂信者」(fanatique) であるとまで言う。

われわれは自分という存在をどうして嫌悪しなければならないのか。われわれの生活は、われわれが思い込まされているほど不幸なものではない。宇宙を牢獄とみなし、あらゆる人間をいずれ処刑される罪人とみなすのは、狂信者の考えである。(XXV, rem. VI, *LP*, p. 169)

ヴォルテールは、われわれに与えられた条件を受け入れ、その枠のなかで最大限の幸福を享受することを提案する。たとえ人間が「自分が釣り合いをもつ部分」(Passage des *Pensées* cité dans XXV, rem. LIV, *LP*, p. 187-188) しか知りえないのだとしても、「われわれは多くの真理を知っている。われわれは多くの有益な発明を行った。蜘蛛と土星の環の間に存在しうる関係を知らないとしても、落胆するにはおよばない。われわれの手の届く範囲で探求を続けることにしよう」(XXV, rem. LIV, *LP*, p. 188) と。

このような現状肯定の道徳は、現状を神から与えられた運命として受忍する態度、不平を言わずに従う姿勢へと結びつく。たとえ自分は不幸な境遇にあったとしても、そのことが宇宙の秩序においてなんらかの意味をもつと考えて納得する姿勢である。

地球、人間、動物がみな、神意の秩序のなかであるべき状態にあると考えること、これこそが賢者の態度であると、私は思う。(XXV, rem. VI, LP, p. 169)

そして、このような摂理に対する信頼は、ヴォルテールにおいて、自己の未来に対する楽観的な展望と軌を一にしている。パスカルによれば、人間が、「唯一自分に属している時である現在」(S80-L47)に注意を向けず、「つねに過去と未来にのみ気を取られている」という事実 (Passage des *Pensées* cité dans XXV, rem. XXII, LP, p. 176) は、人間の宿命的な不幸を象徴的に表している。人間はつねに過ぎ去った時の幸福を懐かしむか、未来の幸福を期待するかのみならず、現在を幸福と感じることはないからだ。だがヴォルテールは反対に、つねに未来に希望を見いだす人間の性向に、積極的な価値を認めている。

われわれをたえず未来へと差し向ける本能を与えてくださったことに対して、自然の造物主に感謝しなければならないのであって、不平を言うなどともんでもないことだ。人間にとってもっとも大切な宝は希望なのであって、それはわれわれの悲しみを和らげ、現在保持している楽しみのうちに未来の楽しみを描き出すのである。(XXV, rem. XXII, LP, p. 176)

また、この主張によって彼は、未来の幸福を得ようとする現在の活動、すなわち努力と労働を讃えている。この考えは、後年 (1759 年刊) の小説『カンディード』の有名な末尾の一節「わが庭を耕さなければならない」を想起させる。

もし人間が、不幸のあまり現在にのみ執着していたとしたら、種をまくこともせず、家を建てることもせず、植物を植えることもせず、何に備えることもないだろう。この偽の享楽のさなかで、すべてを欠くことになるだろう。(XXV, rem. XXII, LP, p. 176)

3. 気晴らし

未来の幸福を目標として何らかの活動に従事することを人間の本分と考えるヴォルテールにとって、もっとも受け入れがたいのが、パスカルの「気晴らし」の観念であった。パスカルは、人間がみな、自分がやがて死んでしまうという悲惨な境遇にあるという事実から目を背けるために、たえずさまざまな活動に従事していると指摘する。彼は言う。「われわれの悲惨を和らげてくれる唯一のものは気晴らしである。しかしそれこそがわれわれの悲惨の最たるものである。なぜな

らこれこそが、われわれが自分について考えることを妨げ、われわれを知らず知らずのうちに滅ぼしてしまうからだ」(S33-L414)。この「気晴らし」には、賭博、狩猟、芸術、学問、政治など、およそ人間の世俗的活動のすべてが該当する。ヴォルテールは、パスカルの言う「気晴らし」はなんら否定されるに当たらないと主張する⁷⁾。その根拠はおおよそ次の三点からなる。

第一に、ヴォルテールにとって、パスカルの言う意味での「気晴らし」は、人間である以上決して避けられない。「気晴らし」を一切行わない人間、すなわちいかなる活動も行わず、自分のこと、自分の死後の運命のことだけを内省している人間など、この世に存在しえない。「火が上に向かい、石が下に向かうのと同じように、人間は活動のために生まれる。人間においては、いかなる活動も行わないことと存在しないことは同じ意味である」(XXV, rem. XXIII, *LP*, p. 177)。

第二に、「気晴らし」は、苦しみを癒やす手段となる。パスカルは、一人息子を亡くしたばかりの父親が、狙い定めた獲物を狩るのに熱中しているさまを揶揄するが、ヴォルテールにとってこの父親は、なんら咎められる理由はない。それどころか、人間が気晴らしによって悲しみを早期に癒やす性質をもっていることを、幸いだという。「この男は大したものだ。キナノキが熱病に効く以上に、気晴らしは苦しみの薬になる。それゆえ、自然を非難するのはやめよう。いつもわれわれを救おうとしてくれているのだから」(XXV, rem. XXVII, *LP*, p. 178)。

そして第三に、「気晴らし」は、社会の存続に必要な不可欠である。社会は人間相互の友好のみならず葛藤をも含む関わり合いであり、それは人間の政治・経済・文化のあらゆる領域に関わるさまざまな活動を通じて形成される(ヴォルテールは『哲学書簡』第10信で、商業活動の重要性を指摘している)。その意味で、「もしわれわれの原初の祖先の各人がおのれのことだけしか考えていなかったのであれば、人類は危殆に瀕していただろう」(XXV, rem. XXIV, *LP*, p. 177)。気晴らしという「この秘かな本能は、社会の第一原理にして必要な基盤であって、むしろ神の善意に由来し、われわれみずからの悲惨に対する意識というよりは、むしろわれわれの幸福の手段なのである」(XXV, rem. XXIV, *LP*, p. 177)。こうしてヴォルテールは、パスカルとは反対に、人間が無為を倦怠と感じて行動(パスカルに言わせるとこれは実のところ「騒ぎ」にほかならないのだが)に乗り出すことを、幸いであると評価する。これによって造物主はわれわれを、「隣人、ならびに自分自身に対して有益であるようになさしめている」のだという(XXV, rem. XXVI, *LP*, p. 178)。

パスカルの「気晴らし」批判の趣旨は、人間が死後において与えられるかもしれない絶対的で無限大の幸福を得るための探求——すなわち神への信——を忘れて、やがて到来する肉体の死によって終焉を余儀なくされる空しい幸福を真の幸福と取り違えていることを指摘することにある。ヴォルテールはまさに、このかりそめの幸福こそが神の恩恵であると主張している。二人の議論は、ここでも出

7) マッケナは、ヴォルテールによるパスカルの「気晴らし」観念の批判に、とりわけ英国の思想家たち(ロック、シャフツベリ、ボリングブルック、ポープ)の影響を認めている。Voir A. McKenna, «Introduction», *LP*, p. 45 *et sq.*

発点からしてかみ合っていない。

4. 身体の生命

最後に、ヴォルテールの人間の身体に対するまなざしについてごく簡単に見ておこう。彼の思想は、この点においてもパスカルと明白に対立している。

パスカルの護教論において、身体の否定的な価値は議論の前提であり、疑いのない命題であるかのように提示されている。パスカルの世界観を象徴的に示す「三つの秩序」の断章 (S339-L308) のなかで、「身体の秩序」は「精神」および「慈愛」のそれよりも無限に価値の低いものとされているし、また、人間を神への愛から遠ざけ、被造物への愛へと傾ける「邪欲」(concupiscence) や「情念」(passions) は、人間の身体に起因する欲望である⁸⁾。

ヴォルテールは、これとは対照的に、身体を第一に尊重し、「自己愛」(amour-propre) をそのために神から与えられたものだとする。

私は、[...] 自己自身への愛は、あらゆる人間において同等であること、それが五感と同じくらい人間にとって不可欠であること、自己愛がわれわれの生命維持のために神から与えられたこと、神はこの自己愛を統制すべく宗教を与えてくれたことを理解している。(XXV, rem. III, LP, p. 165-166)

パスカルにおいて自己愛は、人間が犯した原罪に起因する罪深い欲望であり、神への愛を妨げ、自己を他者よりも優位に立たせようとするものであった⁹⁾。このとき、「人間はすべて、生来互いに憎み合う」(S243-L210)。ところがヴォルテールは、パスカルとはまったく逆に、この自己愛を他者への愛の基盤とみなし、肉欲とならんで社会を存続させる原動力であるとさえ主張する。ここで自己愛は、宗教的な意味を脱して、自己の身体を生命を維持する本能という意味に転化している¹⁰⁾。

自己愛がなければ、社会の形成も持続も不可能である。それは、肉欲 [邪欲]

8) ただし、次の拙著では、護教論の試みを中心としたパスカルの思想において、否定的な価値をもつ人間の身体および肉体が、逆説的に肯定的な価値づけを得るに至る過程を明らかにした。山上浩嗣『パスカルと身体が生』大阪大学出版会、2014年。

9) この点について、山上浩嗣、前掲書、第一章「愛と邪欲」、9-32頁を参照。

10) ルソーは、自然状態における「自己愛」(amour de soi) と、文明状態において発生する「自尊心」(amour-propre) とを区別している：「自尊心と自己愛を混同してはならない。この二つの情念は、その本性からもその効果からも、きわめて異なったものである。自己愛は自然の感情で、すべての動物を自己保存に注意を向けさせるが、人間にあっては、理性によって導かれ、憐れみの情によって変容し、人類愛と徳とを生み出すのである。自尊心は相対的で、人為的で、社会のなかで生まれ、各個人をほかのだけよりも自分を重んじるようにさせ、お互いに行うあらゆる悪を人々に思いつかせ、名誉心の真の源となる感情にほかならない」(Rousseau, *Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes*, Première Partie, note XV par l'auteur, in *id.*, *Œuvres complètes*, III, édition établie sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Paris, Gallimard, «Pléiade», 1964, p. 219)。

ヴォルテールの「自己愛」(amour-propre) は、ここで言う「自己愛」(amour de soi) に近いものとして構想されているのかもしれない。逆に、パスカルの「自己愛」(amour-propre) は、ルソーの「自尊心」(amour-propre) に近い。

がなければ子どもをつくるのが、食欲がなければ摂食しようと思うことができないのと同じである。他人への愛を支えるのは、自己自身への愛である。われわれが互いに相手を必要とすることで、われわれは人類に役立つのである。これがあらゆる交流の土台であり、人間の永遠の絆である。[...] 自然がどんな動物にも与えたこの自己愛が、他人の自己愛をも尊重するようわれわれに告げるのである。(XXV, rem. XI, LP, p. 171-172)

ヴォルテールにおいてはさらに、精神の正常な機能が、身体健康状態に依存している。この近代的な発想も、邪欲の十全な享受を妨げる身体の病気こそがキリスト者の不断の状態であるとして、それを受け入れるパスカルの考えと、著しい対照をなしている¹¹⁾。次の一節における「情念」(passions)もまた、『パンセ』において同語に認められた否定的な意味を喪失している。ここで「情念」は、健全な身体に宿れば激しくなる欲望のことであり、この欲望は、激しければ激しいほど精神の活動も活性化するものであることが示唆されている。「情念」はもはや抑制されるべきものではなく、人間の喜ばしい生命力の指標のような価値を与えているのである。

身体器官がすべて整った者ほど激しい情念をもつ。[...] われわれの器官がどれほど丈夫で、どれほど精密であるかに応じて、また、われわれがどれほど激しい情念をもっているかに応じて、われわれの観念は正確にも支離滅裂にもなるし、漠たるものにも明瞭なものにもなる。(XXV, rem. III, LP, p. 166)

*

以上、信仰と理性の関係、人間の条件、気晴らし、人間の身体と生命の4つの論点に関わる考察を中心に、ヴォルテールのパスカル批判を概観してきた。理性の無力さを根拠に教義の超自然的神秘を正当化するパスカルに対し、理神論者ヴォルテールは、教義の合理的要素を強調しようと努めている。また、原罪による墮落を経た人間の現況を悲劇的であると見るパスカルに抗して、ヴォルテールは、不完全さこそが人間の本分であり、この与えられた条件においても十分な幸福は得られるという楽観論に立つ。ヴォルテールはさらに、パスカルの「気晴らし」批判に対し、「気晴らし」は個人の苦しみを癒やすのみならず、社会全体の幸福に不可欠であると擁護する。ヴォルテールのこのような現世的幸福への志向性は、パスカルにおいて「慈愛」(神への愛)の対極にあるものとして厳しく断罪された「自己愛」や「邪欲」を肯定する姿勢と軌を一にしている。これらの欲望は、人間の心身の健康の維持に貢献し、社会の安寧と福祉を実現しうるのである。

二人の見解は共約不可能なまでに対立している。パスカルは、人間の宿命的な不幸の原因を原罪に求め、信仰を通じて死後に神から与えられるかもしれない永

11) この点について、山上浩嗣、前掲書、第五章「病と死」、161-181頁を参照。

遠の生に希望を託せよと誘う。対してヴォルテールは、教義の合理的側面を尊重し、あくまでも現世において神から授けられた幸福に感謝し、労働や他者との交流を通じて、それを社会全体で持続的に発展させていくべきことを説いている。

赤木昭三は、「パスカルと一八世紀」と題する論考のなかで、17世紀において、一切の人間関係は醜い自己愛に基礎を置き、本質的な問題は自己と自己の対決、自己と神の対決であったのに対し、18世紀においては、人間は何よりもまず社会的存在となったことを指摘した。『パンセ』のなかに、「自我は憎むべきものだ。ミトンよ、君はそれを隠しているが、隠したからといって、それを取り除いたことにはならない。だからやはり君は憎むべきものだ」という一節がある。パスカルは、礼儀正しく、「すべての人に親切にふるまう」ミトン流のオネットムの偽善的道德を告発した（S494-L597）。赤木はこの事実をふまえ、18世紀を「パスカルにたいするミトンの勝利」とであると評し、こう語る。「今や社交性・社会性こそが人間の本質であり、本能になった。道徳は動機の純、不純を問わない社会道徳になり、善悪とはとりもなおさず社会的有益、有害を指すことになった¹²⁾。」この正当な着眼に即して言えば、自己愛を他者への愛の基盤とみなし、他者との交際・交流を通じて社会の経済的發展を図ることを善とみなすヴォルテールはまさにミトンの末裔である。ヴォルテールは、パスカル批判の短い文章のなかで、モンテスキューやルソーに先駆けて、18世紀的な道徳観を鮮烈に提示したのである。

しかしながら、この第25信を、著者の意見表明ではなく、純粋に『パンセ』の批評として読めば、とうてい出来のよいものとは言えない。相手の見解を一刀両断のもとに切り捨て、単純にその正反対を主張することに終始し、相手がなぜそのような意見をもつに至ったかという点について注意を向ける姿勢が認められないからだ（たとえば、「賭け」の議論に関する注釈5のやりとりを見よ）。各々の断章の解釈に際しても、そこで語られていることがらにのみ反応し、他の断章での主張を加味して、より慎重に相手の真意を探るという態度も見受けられない。ヴォルテールが参照した『パンセ』の版が、編者による大幅な改変を経たものであるという事実を考慮しても¹³⁾、彼のパスカル思想への理解は、あまりにも表層的にすぎると思われる。同じ『哲学書簡』において、ニュートン、ロック、デカルトの思想に対しては、あれほど透徹した解釈と公正な判断を提示しているのに、パスカルに対してはなぜこうも主観的で独断的な批評にとどまったのかと、疑問を抱かずにはおられない。

ヴォルテールは、『パンセ』のなかで彼が抵抗を覚える断章だけを選んで批評し

12) 赤木昭三「パスカルと一八世紀」、徳永惇編著『社会の哲学—現代哲学選書9』学文社、1975年、99-100頁。

13) LP編者の検証によると、『哲学書簡』第25信執筆時にヴォルテールが参照していたのは、1684年刊のポール＝ロワイヤル版『パンセ』である（LP, p. 488）。ヴォルテールはしばしば、まさに編者が変更・付加した表現や文章を、そうと知らずに批判している。ほんの一例を挙げれば、ヴォルテールは、「Le peuple a les opinions très saines : par exemple, d'avoir choisi le divertissement et la chasse plutôt que la poésie [...]」(Lettre XXV, rem. LIX, LP, p. 245) という『パンセ』の一節を批判しているが、パスカル自身は最後の語 *poésie* を *prise* (獲物) と書いていた。

た。彼は第 25 信の冒頭で、「私はパスカルの天才と雄弁とを尊重している」(XXV, LP, p. 163) と言う。ジャン・メナールも言うように、ヴォルテールがここで選ばなかった断章については、むしろ共感を寄せていた可能性もある¹⁴⁾。現に、第 25 信発表の 18 年後、シャトレ夫人を失った 3 年後 (1752 年) にヴォルテールが刊行した小説『ミクロメガス』のなかには、パスカルの文章と見まがう次の一節が含まれている (ミクロメガスに対して土星人が語ったせりふの一部)。

われわれの存在は一点であり、われわれの人生は一瞬であり、われわれの地球はひとつの原子にすぎない。少しものを学び始めるとすぐに、経験を重ねる暇もなく死がやってくる。私としては、どんな計画も立てるつもりはない。自分は巨大な海のなかの一滴のしずくのようなものなのだから¹⁵⁾。

18 世紀が楽観主義一色の時代でなかったのと同じく、ヴォルテールもまた、人生に不安と倦怠を覚えることもあったし、愛する人を失って絶望に陥ったりもした。パスカルの描き出した陰鬱な世界観や人間の悲惨を完全に否定することはできなかったのである¹⁶⁾。ヴォルテールはパスカルに「ある種の魅力」を覚え、みずからの「内なる分身」を認めたというジャン・メナールの指摘は、おそらく正しい¹⁷⁾。

(大阪大学教授)

引用凡例

1. ヴォルテール『哲学書簡』からの引用は、次のテキストに従う。略号 LP とともに、手紙の番号および頁番号を (第 25 信の場合は、必要に応じて注釈 [remarque] の番号も) 記す。例: XXV, rem. LIX, LP, p. 245.

Voltaire, *Lettres philosophiques*, édition critique par Olivier Ferret et Antony McKenna, Paris, Classiques Garnier, 2010.

2. パスカル『パンセ』からの引用は、次のテキストに従う。断章番号を記号 S (Sellier) とともに示し、ラフユマ版 (éd. L. Lafuma, Paris, Luxembourg, 1952) による断章番号を記号 L とともに付記する。長い断章からの引用の場合は [] 内に同書の頁番号を付す。例: S182-L149 [918].

Pascal, *Pensées in id., Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par Gérard Ferreyrolles et Philippe Sellier, Paris, Librairie Générale Française, «La Pochothèque», 2004.

14) Jean Mesnard, «Voltaire et Pascal», in *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes et synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 589-599.

15) Voltaire, *Micromégas*, in *id., Romans et contes*, édition établie par Frédéric Deloffre et Jacques Van Den Heuvel, Paris, Gallimard, «Pléiade», 1979, p. 23.

16) この点について、赤木昭三、前掲論文、87-88 頁を参照。

17) Jean Mesnard, «Voltaire et Pascal», art. cit., p. 590.